

マレーシアにおける異文化共存

拓殖大学政経学部教授 平戸幹夫

1 複合民族（種族）国家マレーシアの誕生

マレーシアはマレー人、華人、インド人、イバンなど多くの種族からなる複合民族（種族）国家である。2004年現在の総人口は2,558万人、その構成は、下記の通りである。

マレーシア人2,389万人（国籍を持つもの）
マレー人1,289万人 その他ブミプトラ280万人
華人607万人 インド人181万人 その他30万人
非マレーシア人169万人（国籍を持たないもの）
インドネシア人、フィリピン人など

民族（種族）別人口構成は、新経済政策以降少なからず変化してきている。合計特殊出生率が種族によって異なり、華人、インド人の低下が急速に進んだのに対してマレー人の低下が遅れたためにマレー人の人口増加率の方が高い状態が続いた。そのためマレー人の構成比が増加し、対照的に華人、インド人の割合が低下した。しかし最近ではマレー人にも低下傾向が強まってきている。非マレーシア人については、インドネシア人が最も多く、フィリピン人その他を含む非マレーシア人の実数は統計数値よりもっと多いともいわれる。彼らの多くはより就業機会が多く収入も多いマレーシアに働きに来ている出稼ぎ労働者たちである。彼らはおもにプランテーション、建設、メイドなどの仕事について、マレーシア人のつきたがらない職種でマレーシア社会の底辺を形づくっている。

複雑な民族（種族）構成は歴史的にはイギリスによる植民地統治によってもたらされたものである。またイギリスの統治以前のポルトガルによるマラッカ征服の残したポルトガル人のコミュニティもマラッカに残っている。華人は主とし

て錫鉱山開発の労働者として南中国からやってきた人々の子孫であり、インド人はゴムプランテーションの労働者として南インドからやってきた人々の子孫である。

2 マラヤ連邦独立とマレーシアの結成

1957年にマラヤ連邦として独立してからイギリス人はしだいに行政でも経済でも後景に退いて現地化が進行した。イギリス人が頂点に位置し、マレー人、華人、インド人は相互に没交渉の状態にある典型的な分割統治が終わった。独立後都市を中心に互いに接する機会が増えるようになった。経済的な発展は都市を中心に進んだ。都市経済の発展に比して農村経済は発展から取り残され気味であった。マレーシア結成後の経済発展はその恩恵を享受するものと取り残されるものを生んだ。

所得階層から見た格差の拡大以上に「隣の芝は青く見える」の譬えのように、不平等感が強まった。

3 人種暴動発生と新経済政策

1969年の総選挙をきっかけに人種暴動が発生した。クアラルンプルではマレー人と華人の大規模な衝突が発生し多くの死者が出た。この暴動の收拾過程でブミプトラ優先の政策を柱とする新経済政策が策定された。これは1971年から始まって1990年を目標年とするもので、いわば現存する格差を是正してすべての民族（種族）のスタートラインをそろえようというものであった。新経済政策の20年の間にマレー人の経済的地位は飛躍的に向上した。しかし同時にマレー人内部の経済格差が広がったことは否めない。そして1990年を過ぎてもブミプトラ政策は継続されている。

4 複合種族の共存

ごく最近の民族（種族）間の不協和音は教育問題を巡って発生している。マレー語化政策が学校教育で所期の目標を達成したものの英語のレベルは反比例的に低下したことが近年とみに問題視されるようになった。そこで政府は初等、中等の学校

教育課程の数学、理科の分野で教授言語を英語とする方針を打ち出した。しかし華人団体を中心に反対論が起こり大きな論争問題に発展した。2003年より小学校1年、中学1年、第6学年初年（日本の高校3年相当）より学年進行で順次英語による理数科教育が実施されることとなった。この政策の成否についてはもう少し時間の経過を見守る必要があるであろう。かような問題をめぐる摩擦は今後とも起こりうるであろう。しかし今日ではかつての暴動の再発を懸念する声は聞かれない。

植民地支配の過程で形成された複合民族（種族）社会の軋轢という負の遺産の克服が独立後の課題であったが、現在では複合性をプラスに生かす取り組みが進んでいる。食文化の多様性と豊かさ、服飾、音楽と様々な芸術の多様性は豊かな自然と並んでこの国の重要な観光資源となっている。

マレーシアには多くの民族（種族）の共存を象徴して多様な祝日が存在する。全国の祝日と州独自の祝日があり、各民族（種族）の祝日が全国および州の祝日として全民族（種族）によって共有されている。現行グレゴリオ暦の正月1日、中国正月第1日、第2日、断食明けのハリラヤプアサ第1日、第2日、ハリラヤハジ、アウル・ムハラム（イスラーム暦正月）、メーデー、釈迦誕生日、国王誕生日、ムハンマド誕生日、独立記念日、クリスマスなど多様な民族（種族）、宗教を網羅した国民の祝日が設けられている。

また次のような各州独自の祝日もある。半島マレーシア9州のスルタンとペナン、マラッカの州元首、サバ、サラワクの州元首の誕生日はそれぞれの州の祝日となっている。このように全州にある祝日と州ごとに異なる性格の祝日とがある。後者については各地域の宗教や伝統に由来するものである。イスラーム教に基づく祝日としてはラマダン（断食月）第1日（ジョホール州など）、コーランの啓示記念日（クランタン州）、ムハンマド召命日（クダー州など）がある。ヒンドゥー教に基づくものとしてはタイプサン（ジョホール州など）、ディーパーバリー（全半島諸州）があり、キリスト教に基づくものとしてはイースター（サ

バ州など）、ボルネオ島の先住民の伝統に基づくものとしては収穫祭（サバ州など）、ダヤクの祝祭日（サラワク州）などがある。

マレーシアは宗教も多様であり、言語も多様であり、それらはほぼ民族（種族）に対応している。したがって宗教も、言語も民族（種族）間の軋轢を孕んでいる。しかし1969年の暴動以後は再び暴発が起きないように入念な舵取りが行われてきた。憲法上、国教はイスラームであるが、個人の宗教の自由は保障されている。国語はマレー（マレーシア）語であり、最も広く学校教育で用いられている。しかし華語も初等、中等の教育や新聞、テレビ、ラジオ、出版物などで広く用いられている。インド人の日常生活で広く使われているのはタミール語であり、新聞やテレビ、ラジオでもタミール語が使われている。

異民族（種族）間のインターマリッジはボルネオ島側に多い。イスラーム教徒と非イスラーム教徒の間のインターマリッジは現在でも多いとはいえない。少ないながらもインターマリッジは存在するが、その子どもたちはセンサスでは自己申告で「ハーフ」の分類項目はないのでいずれかの民族（種族）を選ぶ。基本的に例外なくイスラーム教徒であるマレー人と非マレー人の間に生まれた子はマレー人として申告するのが一般的である。

小学校の国語教科書や公民教科書には多くの民族（種族）が日常生活で仲良く交わる様子が色々な生活場面で多様に描かれている。また華語小学校にマレー人の子女が学ぶことも今では珍しくなくなった。それはマレー人の親たちが自分の子どもが華語を修得すれば将来有利になると考えることである。1969年の暴動の頃には想像もつかなかったことである。今やマレーシアでは、多民族（種族）が共存するだけでなく、多くの民族（種族）が織りなす文化的多様性がこの国の魅力になっていて、かけがえのない財産となっている。異なる民族（種族）、宗教、言語、文化をめぐって今日世界各地で起きている紛争を考えると、マレーシアがこの1世代の間に経験した出来事は貴重な教訓に富んでいるように思われる。